

看護学科に入学した高大接続参加学生の目標志向、自己効力感の変化

豊島めぐみ^{*1}・田中希穂^{*2}・津田右子・上田博之

要 旨

本研究では、高大接続事業に課題をフィードバックするため、高校在学時に高大接続事業に参加して看護系短期大学に入学した学生の入学時および1年次前期終了後の目標志向、自己効力感を事業に不参加の学生と比較するとともに、職業的アイデンティティについて考察した。その結果、高大接続事業に参加した学生は、学習目標志向と行動統制に関する自己効力感において、不参加の学生よりも高い傾向を示した。入学後の半年間に大学教育に触れる中で行動統制の自己効力感、目標志向のうち学習目標と達成目標が低下する傾向がみられた。また、高校在籍時高い水準にあった高大接続事業参加学生の職業的アイデンティティは、大学1年次前期終了時に低下し、目標志向の低下との関連性が示唆された。これらのことから、高大接続事業は入学前準備としての目標志向や自己効力感を高める重要な役割を果たすが、学生の入学前後の看護師像のギャップを小さくすることや短期大学入学後に職業的アイデンティティ形成を念頭に学習目標の促進と自己効力感向上を目指した教育を行うことが必要である。

Keyword: 高大接続、目標志向、自己効力感、職業的アイデンティティ

1. はじめに

2014年には、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（以下、中教審の答申）」¹⁾において、「生きる力や確かな学力を育むために高等教育と大学教育、大学入試者選抜の改革が必要である」ことを指摘している。それは、社会構造の変化や価値観の多様性により大学への入学動機や職業意識が変化し、目的意識や職業適性を吟味せずに進学する学生が増えていることが一因と考えられる。専門性の高い医療系の大学は卒業後の進路が決まっているために、進路意識が未熟なまま進路を決定すると、その後の学生生活に適応することが困難となり、学習意欲の欠如、アパシー、留年などの現象を招来することになりやすいことが指摘されている²⁾。中教審の答申以降、高大接続の試みは量的・質的に拡大・深化して、高校生が大学入学前に大学の授業内容を知る機会は以前に比べて充実したが、進路が明確な医療系大学においても以前と同様に入学直後から進路の迷いを抱き続ける学生がみられる。

看護系大学においても、進学動機は看護志向と共に経済価値や周囲の勧めなど消極的動機による進学の多いことが見出されている³⁾。消極的な動機で入学する学生には、学習習熟度に問題を抱える場合も多い。過密なカリキュラムの中で単位を一応習得したとしても、知識活用力を求められる実習で不適応状

態に陥る学生がみられる。一方、看護学生の中には、強い看護志向がなくても、看護基礎教育により自己的看護観を導き出して確立させていく例も少なくない。そして、看護の価値を認識することにより、看護職としてのアイデンティティ形成が促される。この看護職の職業的アイデンティティの形成は、学習目標や自己効力感と相互に影響すると考える。そこで、本学では、平成27年度より高大接続事業として、医療・看護への目標志向を高めて職業選択の一助となることを目的に⁴⁾、高等学校の看護・医療コースの2年生と3年生を対象に短期大学の看護学科教員による「看護・医療入門」科目的講義を始めた。①大学の教員の講義・演習に触れる、②大学の高度な施設・設備を用いた体験学習を行う、③看護の臨地実習に携わる教員の講義により職業をより具体的にイメージする、などが授業の目標として参加した生徒に示された。そして、平成27年度高大接続事業終了後の調査において、看護師志望者の職業的アイデンティティは高い水準にあることが示された。また、実習などを通じて実践的な職業イメージを抱かせることが学習意欲向上や職業的アイデンティティ形成に重要であると示唆された⁵⁾。

本研究では、高大接続事業に成果や課題をフィードバックするため、平成27年度高大接続事業に参加した学生の看護系短期大学入学時および1年次前期終了後の目標志向、自己効力感を調査し、職業的アイデンティティについて考察する。

*1 梅花女子大学 看護保健学部

*2 同志社大学 免許資格課程センター

表1 調査項目

尺度	下位尺度	質問項目
目標志向	学習目標	できる限り多くのことを学ぶことが、私にとって勉強での重要な目標だ 私は新しいことを学ぶために勉強する 新しいことを学ぶことが好きだ
	遂行接近目標	他の生徒から優秀で才能があると思われることは、私にとって重要だ 他の生徒より良い結果や成績を取れた時、私は目標を達成できたと感じる 私が有能であると他の人たちに示すのは気持ちがいいことだ
	達成目標	勉強で良くできることが、私にとって重要な目標だ 良い成績を取ることは、私にとって重要だ 私の目標は、学校で良い成績を取ることだ
	遂行回避目標	私は、鈍くて、能力がないと見られるかもしれない状況を避けようとする 私は、失敗や間違えをするかもしれない状況から逃げようとする 他の生徒の前で失敗しないことが、私にとって重要だ
	回避目標	私は、できるだけ努力をしないで、学校の勉強とか宿題を終わらせようとする 私は、いつも学校の勉強で与えられた課題以外のことはしようがない 私は、学校の課題や宿題を終わらせることが大切で、余分な勉強をすることに興味がない
自己効力感	結果統制	授業で説明される問題は、大体理解することができると思う 割り当てられた課題を終わらせるのは簡単だと思う 成績はおそらく良いだろう
	行動統制	提出物やレポートの締め切りが守れるよう、計画的に進めることができる 大学での勉強を計画立ててすることができる 勉強するように自分自身を動機づけることができる
職業的アイデンティティ		今ならうとしている「看護」の仕事を将来長く続けたい 今選んでいる「看護」の仕事に私は適している もう一度「看護」を選ぶとしたらまた同じ「看護」を選ぶ 後輩に将来について相談されたら今自分がなろうとしている「看護」を勧める 自分が選んだ「看護」の仕事に誇りを持っている もっと「看護」についての勉強がしたい 今の「看護」の道を選んだことに満足している 将来「看護」として仕事をすることに自信がある もっと今選んでいる「看護」の技術を磨きたい 今選んでいる「看護」の仕事は自分の能力を生かせる

2 方法

2.1 調査対象

A 高等学校の看護・医療コース 2・3 年を対象に短期大学の看護学科教員が平成 27~28 年度に実施した「看護・医療入門」を 2 年間受講した学生のうち B 短期大学看護学科に入学した学生 7 名を調査対象とした。この調査群が受講した「看護・医療入門」の授業回数は、高校 2 年次に 21 回(通年)、3 年次に 15 回(通年)であった。授業テーマは看護の 4 つの概念、人間・健康・看護・環境を基本として、2 年次は基礎的内容、3 年次は臨床看護の理解に近づく内容であった。授業形態は講義を主体とし、見学、体験学習、グループワークなどが含まれた。短期大学入学後の対照群として、調査群と同年度に B 短期大学看護学科に入学した学生から研究への参加同意が得られた 44 名に調査を行った。

2.2 調査内容および調査時期

短期大学入学直後（平成 29 年 4 月）に調査群および対照群に対して目標志向と自己効力感について調査した。また高大接続事業に参加した調査群は、高等學校 2 年在学中の「看護・医療入門」授業終了時（平成 28 年 2 月）に調査された職業的アイデンティティ⁵⁾と同じ調査を、短期大学 1 年次前期終了後（平成 29 年 8~10 月）に行った。職業的アイデンティティについては、対照群に対しても同様の調査を、短期大学 1 年次前期終了後に実施した。

いずれの調査に際しても対象者に書面及び口頭で調査協力の依頼を行い、高校在学時には質問紙調査、短期大学入学後には web 調査を実施した。目標志向、自己効力感、職業的アイデンティティの各調査項目を表 1 に示す。目標志向に関しては、Niemivirta⁶⁾ の「Goal Orientations and Agency Beliefs Scale」

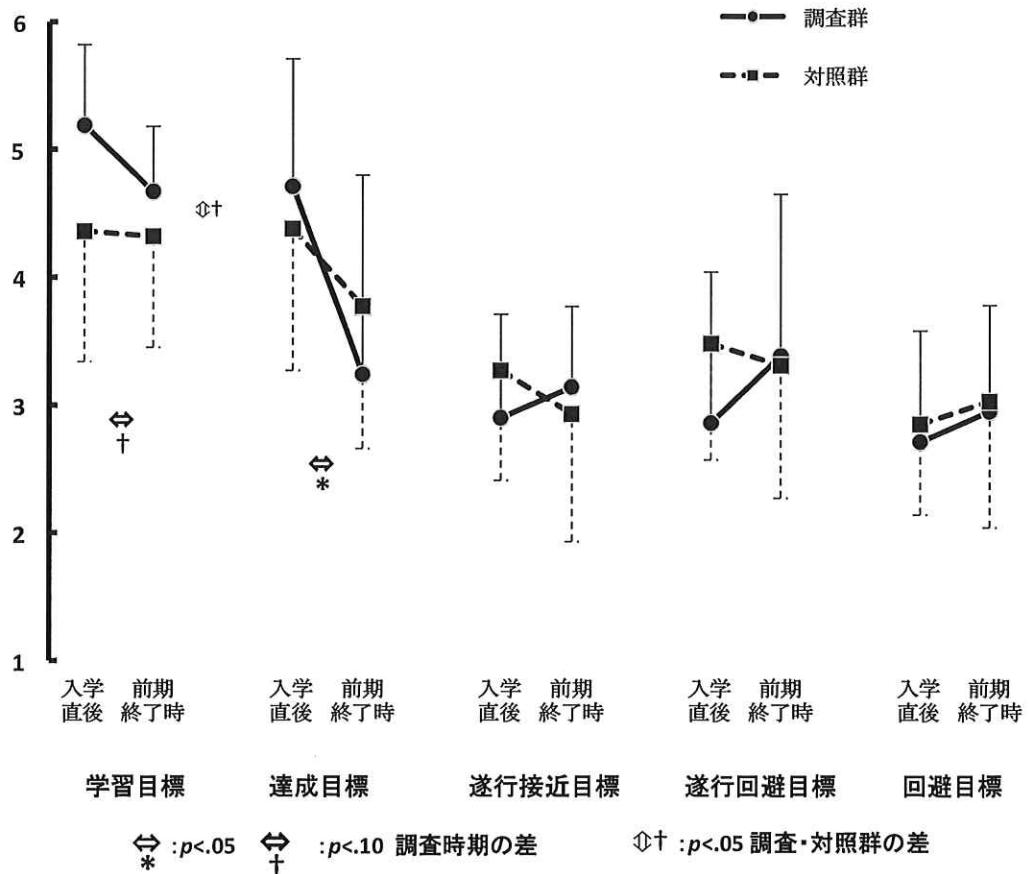


図1. 入学直後および前期終了時の目標志向尺度得点

を翻訳したのち、学習目標・達成目標・遂行接近目標・遂行回避目標・回避目標それぞれ3項目を抜粋した。自己効力感に関しては、Bandura⁷⁾ や Pintrichら⁸⁾の「Self-efficacy Scale」を参考に、結果統制に関する自己効力感3項目、行動統制に関する自己効力感3項目を作成した。自己効力感と目標志向の測定においては、「1:全く当てはまらない」から「6:非常に当てはまる」の6段階尺度で評定させた。職業的アイデンティティに関しては、波多野ら⁹⁾が開発した「職業的アイデンティティ尺度」12項目から高校生に適切でない2項目を削除した10項目について「1:とてもそう思わない」から「5:とてもそう思う」の5段階尺度で評定させた。個人ごとに各下位尺度の全項目の平均値を算出して尺度得点とし、調査時期、調査・対象群ごとに平均値と標準偏差で示した。

2.3 分析方法

目標志向および自己効力感の下位尺度について、調査群と対照群および短期大学入学直後と1年前期終了時の比較を行うために混合モデルの2要因（調査時期・高大接続事業参加の有無）分散分析を用いた。調査群の高校2年生時と短期大学1年次前期終了時の職業的アイデンティティ比較にはPaired-t検定を、

また、短期大学1年次前期終了時の調査群と対照群の職業的アイデンティティ比較にはt検定を用いた。分析にはSPSS 24.0J for windows用いて、有意水準はいずれも5%未満に設定した。

2.4 倫理的配慮

調査対象者に、研究目的・意義・方法・結果の公表・個人情報の保護・データの匿名性の保持・研究への参加が学業成績に影響しないことを口頭と書面またはwebページで説明した。自由意思による調査用紙の提出または調査サイトにおける入力を求め、用紙の提出またはサイトへの入力をもって研究への同意を得た。また、本研究の実施に関して大阪信愛女学院短期大学研究倫理委員会に承認を得た。

3 結果

3.1 目標志向

目標志向とは、どのような目標をもって学習をするのかという学習者個人の意識の特性である¹⁰⁾。図1に調査群及び対照群の短期大学入学直後と前期終了後における目標志向の各下位尺度得点を示す。学習目標の尺度得点における2要因分散分析の結果、高大接続事業参加の有無の主効果が有意傾向であり、

高大接続事業に参加した調査群が対照群に比べて高い傾向であった ($F=3.17 p=.08$)。また、調査時期の主効果も有意傾向であり、入学直後に比べて前期終了後に減少する傾向がみられた ($F=2.89 p=.10$)。達成目標の尺度得点は、高大接続事業参加の有無に主効果は認められず、調査時期の主効果が有意であり、入学直後から前期終了後に有意に下降した ($F=21.05 p<.05$)。遂行接近目標・遂行回避目標・回避目標は、高大接続事業参加の有無や調査時期で差は認められなかった。いずれの下位尺度得点においても、高大接続事業参加の有無と調査時期の要因に有意な交互作用は認められなかった。

3.2 自己効力感

Bandura は、自己効力感について、ある行動を遂行することができると自分の可能性を認知していること、自己効力感が強いほど実際にその行動を遂行できる傾向にあると述べている¹¹⁾。また、安達は、行動統制は課題に必要な行動を成功裡に行う能力の自己評価、結果期待は課題を遂行した結果として何が得られるかについての主観的予測であるとしている¹²⁾。図2に調査群及び対照群の入学直後と前期終了後における自己効力感の下位尺度得点を示す。2要因分散分析の結果、結果統制の尺度得点において高大接続事業参加の有無の主効果は認められなかつたが、調査時期による主効果が認められ、入学直後から前期終了後に有意に上昇した ($F=4.86 p<.05$)。行動統制の尺度得点では調査時期に主効果は認められなかつたが、高大接続事業参加の有無による主効果が認められ、調査群が対照群に比べて高い傾向であった ($F=3.42 p=.07$)。いずれの下位尺度得点においても、高大接続事業参加の有無と調査時期の要因に有意な交互作用は認められなかつた。

3.3 職業的アイデンティティの変化

青年期の職業的アイデンティティは、職業の価値観の確立を通じて人生・社会における自分の役割を決定するための重要な課題である¹³⁾。看護職の職業的アイデンティティは、看護の役割や価値を自己のものとする看護実践の基盤である。看護学生の職業的アイデンティティ形成は、看護基礎教育、看護専門教育、臨地実習などを通して促進されることが望ましい。看護師のキャリア発達において、自らの職業とどう取り組むかという職業的アイデンティティの獲得は重要であり、学生時代からの支援の必要性が指摘されている¹⁴⁾。調査群の高等学校2年在学時と1年次前期終了時の職業的アイデンティティ尺度得点を Paired-t 検定を用いて比較した結果、調査群の職業

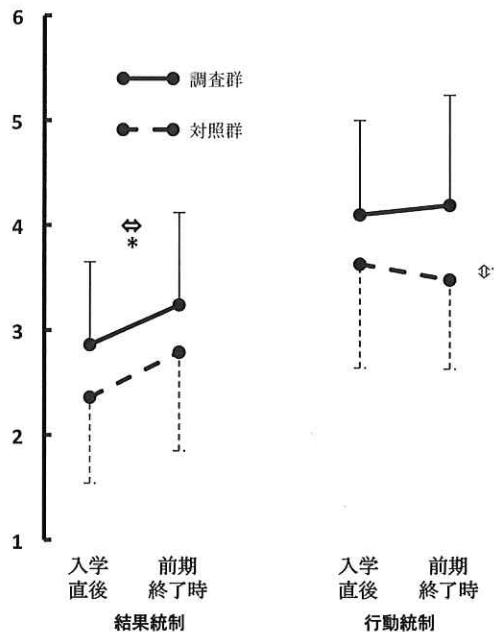


図2. 入学直後および前期終了時の自己効力感の尺度得点
※ : $p<.05$ 調査時期の差 ♦† : $p<.10$ 調査・対照群の差

的アイデンティティの尺度得点は、高等学校2年在学時に比べて短期大学1年次前期終了時の方が有意に低かった ($t=3.60 p<.05$) (図3)。そして、短期大学1年次前期終了時の調査群と対照群の職業的アイデンティティを t 検定で比較した結果、2群間に有意差は認められなかつた。

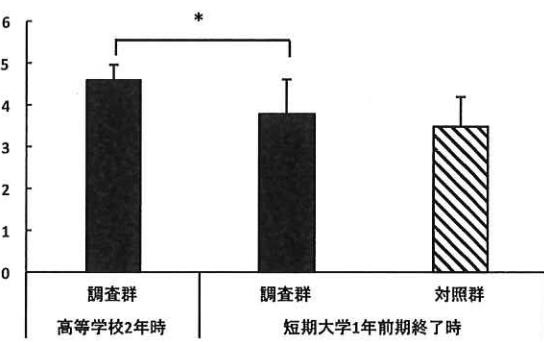


図3. 職業的アイデンティティの尺度得点
*: $p<.05$

4 考察

本研究では、高校在学中の高大接続事業参加が看護の職業的アイデンティティの形成や短期大学看護学科入学時および入学半年後の目標志向や自己効力感に及ぼす影響を高大接続事業不参加の学生との比較から検討し、今後の高大接続に課題をフィードバックすることを目的にした。

高大接続事業に参加した学生は、学習目標志向と行動統制に関する自己効力感において不参加学生よりも高い傾向を示した。高大接続事業では、短期大学教員が高等学校2年生から3年にかけて36回継続的に授業を実施し、臨床看護の理解につながる基礎

の内容を体験や演習を交えて解説した。講義中心であったが、大学の施設や設備を利用することや臨床経験のある大学教員から説明を受けることは高校生にとって新鮮であるとともに実践的な学習につながる内容であったと考えられる。職業イメージがより明確になったことで学習への興味と熟達思考が促進された結果、学習目標が高められたと考えられる。また、大学教員の講義を受講することや大学の施設や設備で体験することで、大学教育が身近なものに感じられたことが自己効力感促進に影響したと推察される。

学習目標は課題の熟達や上達に向けられた目標志向であり、内発的動機づけや積極的でより深い学習方略と正の関係性がみられる^{15, 16)}ことから、看護職への志望動機が促進されるとともに、学習を積極的に深める姿勢を培うことが期待できる。自己効力感は、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかに関する予期であり、自分自身の持つ認知的・社会的・行動的スキルについて判断していくときの内容である。自己効力感が高いほど、不安や恐れは低くなり¹⁷⁾、実際にその課題を達成する確率が高くなり¹⁸⁾、目標としている行動に挑戦しようと努力する傾向を示す¹⁹⁾。実施された高大接続事業への参加が高校生の学習目標や自己効力感を介して、動機づけの促進や適応的な学習プロセスを導くのに効果的であることが示唆された。

しかし、その一方で、大学入学後の半年間の影響を検討してみると、大学教育に触れる中で自己効力感（行動統制）を高めることができないばかりか、目標志向のうち学習目標と達成目標が低下する傾向がみられた。高い学習目標を持った学生が大学生活の中で現実的な学習に対して深く理解することや高い成績を志向することを維持できなかった可能性がある。医療系短期大学における過密な授業スケジュールや要求される基礎学習のレベルに困難さを感じたことが、学習目標や達成目標低下の大きな要因と考える。短期大学では入学試験のハードルが低く、多くの入学生はそれまでに学習における困難さをあまり経験していない。そのために、学習の困難さを克服する方略を持ち合わせていないかもしれない。また、自己効力感は、思考プロセスが行動をコントロールすることで行動達成が導かれるという制御体験、他者の体験を見本にした代理経験、成功できると思われるような言語的説得、行動に伴う身体的な刺激・反応・感情・気分といった生理的情動的状態の4つの情報源（sources of information）に影響される。調査群の比較的高い行動統制は、高大接続事業で触れた代理体験や言語的説得による自己効力感の促進

によるもので、制御体験が乏しいことも推察できる。暗示や勧告・自己教示等を含む言語的説得だけで高められた自己効力感は、現実の困難に直面してたやすく消失することが十分あり得る²⁰⁾。高等学校から短期大学の学習環境に移行するにあたり、学習内容の理解が追いつかず、高い成績を達成する自信の喪失から高いパフォーマンスを志向しなくなることが、対照群を含む学生の達成目標の低下から推測される。高大接続事業により促進された高い目標志向や自己効力感を入学後も維持できる教育方法の検討は急務である。

高大接続事業に参加した学生における職業的アイデンティティは、高校在籍時よりも大学1年次前期終了時の方が低かった。前期終了時におけるこれらの学生の職業的アイデンティティは、不参加の学生と差が認められなかった。波多野らによると、アイデンティティ得点は、①看護短大に入学した1年生が最も高いこと、②2年生で大きく低下すること、③3年生で再び高くなること、④卒業して就業後に再び低下すること、⑤卒業後は徐々に高くなる。また、幼少期に職業を決定して看護学校に入学した学生の職業的アイデンティティは、1年次に最も高く、学習を続けて臨地実習などを通じて現実の厳しさを知ると一時期低下する¹⁰⁾と言われている。これは早期に形成されたアイデンティティが現実とは異なった理想的なイメージによるものであるために生じた低下であり、本調査群も同様の傾向であったかもしれない。

高大接続事業に参加した学生の職業的アイデンティティが高等学校2年から短期大生へ低下したことは、看護の学習に対する興味や深い理解を志向する学習目標や、学習を進めるための行動の実行に対する効力感の低下と関連していることが示唆される。また、入学前に憧れていた学習と短期大学のタイトな時間割や厳しい実習に格差を感じることに起因したかもしれない。その他にも、職業的アイデンティティが低下する理由として、生徒・学生への看護師像の示し方や看護職への促し方が入学前後で変わることが考えられる²¹⁾。看護学科卒業後には看護師として職業に就くという認識を持ち入学する学生が、その後の厳しい指導により「こんなはずではなかった」「こんなにしんどいと思わなかった」などの理由で退学する学生が存在する。青年期の学生が持つ職業的アイデンティティは環境的要因から影響を受けやすく、学生の看護職観を確立する上で職業モデルは重要な要素である²¹⁾。このことを踏まえ、高大接続事業において短期大学の教員は高等学校教員と協働関係を一層強化し、生徒や学生一人一人の状況に留意しながら教育の充実を図ることが重要である。そして、

職業的アイデンティティ形成を念頭に、学習目標の促進と自己効力感向上を目指した教育支援を行うことが必要である。看護学科に入学する生徒の入学前後の看護師像のギャップを小さくすることができれば、高大接続事業は入学前準備の一環としてさらにいっそう重要な役割を果たすと考えられる。

以上のように高大接続事業には高校生の看護学習に対する動機づけを促進する効果があるが、促進された動機づけを維持させるためには実施環境や大学教育の改善が望まれる。入学後の大学教育における動機づけの維持は、職業的アイデンティティ形成の低下を防止するかもしれない。学習行動は先行経験や信念、動機づけ的思考性に基づくものの、生徒が直面している課題そのものやその時の状況に対する評価が行動決定により重要であることが指摘されている²²⁾。このことから教員は、入学直後の学習において学生の動機づけを維持できるよう支えていく必要がある。高等学校と短期大学の連携事業をより深めて目標志向や自己効力感を高めるとともに、入学後のカリキュラムではそれらを維持する授業展開の工夫が重要である。

謝辞

本研究は科学研究費補助金（No. 16K11978）および大阪信愛女学院・平成28-29年度教育研究助成により遂行されました。本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただきました皆様に心から感謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会答申(2014):新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo0/toushin/1354191.htm. (2014) 2018年1月22日閲覧
- 2) 柳井修:キャリア発達論青年期のキャリア形成と進路指導の展開、ナカニシヤ出版、京都(2001)
- 3) 竹本由香里:看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討、宮城大学看護学部紀要、11(1), 13-20 (2008)
- 4) 大阪信愛女学院短期大学看護学科:平成27年度高等学校連携事業、看護・医療コース、シラバス(2015)
- 5) 豊島めぐみ・石井あゆみ・津田右子:短期大学看護学科における高大連携事業に関する一考察－高校2・3年生の学習意欲と職業的アイデンティティの形成変化(第一報)－、大阪信愛女学院短期大学紀要、51, A2, 1-5 (2017)
- 6) Niemivirta, M. : The self at work: Generalized and task-specific self-appraisals in motivation and performance. Paper presented at the 8th European Conference for Research on Learning and Instruction, Gothenburg, Sweden (1999)
- 7) Bandura, A. : Guide for constructing Self-Efficacy Scales. Unpublished manuscript, University of Stanford, CA, USA. (1991)
- 8) Pintrich, P. R. & De Groot, E. V.: Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance. Journal of Educational Psychology, 82, 33-40 (1990)
- 9) 波多野梗子・小野寺杜紀:看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティの変化、日本看護研究学会雑誌、16(1), 22-28 (1993)
- 10) 山本美紀・植野真臣:構成主義的学習におけるルーブリックの活用方法が学習者に与える影響分析—目標志向性、学習観、動機づけ、学習方略、学習課題成績に着目して—日本教育工学会論文誌、39(2), 67-81 (2015)
- 11) Bandura, A.: Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215 (1977)
- 12) 安達智子:大学生の職業興味形成プロセス-手段性・表出性・自己効力感、結果期待の役割について、教育心理学研究、51, 308-318 (2003)
- 13) Erikson, E. H. : Psychological Issues Identity and The Life Cycle, Universities Press, 1959.「自我同一性 アイデンティティとライフサイクル」、Erikson, E. H.著(小此木啓吾訳)、誠信書房(1973)
- 14) 小藪智子・黒田裕子・合田友美他:看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究(第二報)—経年的変化から考える教育的支援—、川崎医療短期大学紀要、27, 25-29 (2007)
- 15) Elliot, A. J. & Harackiewicz, J. M. : Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. Journal of Personality and Social Psychology, 70, 461-475 (1996)
- 16) Ames, C. & Archer, J. : Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. Journal of Educational Psychology, 80, 260-267 (1988)
- 17) Bandura, A., Reese, L. & Adams, N. E. : Microanalysis of action and fear as a function of differential levels of perceived self-efficacy. Journal of Personality and Social Psychology, 43, 5-21 (1982)
- 18) Bandura, A. & Schun, D. H. : Cultivation

- Microanalysis of action and fear as
through proximal self-motivation. Journal of
Personality and Social Psychology, 41, 586-598
(1981)
- 19) Bandura, A. & Cervone, D. : Self-evaluative and
self-efficacy mechanisms governing the
motivational effects of goal systems. Journal of
Personality and Social Psychology, 45, 1017-1028
(1983)
- 20) 池辺さやか・三國牧子:自己効力研究の現状と今後
の可能性, 九州産業大学国際文化学部紀要, 57,
159-174 (2014)
- 21) 藤本裕二・藤野裕子・松浦江美・楠葉洋子:看護大学
生低学年の職業的アイデンティティの推移と特性
の自己効力感及び職業モデルの関連, 日本医学看護
学教育学会誌, 25(1), 38-43 (2016)
- 22) Niemivirta, M.: Motivation and performance in
context: The influence of goal orientations and
instructional setting on situational appraisals and
task performance. Psychologia, 45, 250-270 (2002)

受理 2018年3月10日

公開 2018年3月23日

<連絡先>

上田 博之

〒536-8585 大阪市城東区古市2-7-30

大阪信愛女学院短期大学

ueda@osaka-shinai.ac.jp